

池波正太郎

鬼平犯科帳
21

文春



文春文庫

鬼平犯科帳(二十一)

定価はカバーに
表示してあります

1991年4月10日 第1刷

著者 池波正太郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714246-5

文藝文庫

江苏工业学院图书馆

鬼平犯科帳
藏(二書一)章

池波正太郎



文藝春秋

目次

泣き男

瓶割り小僧

麻布一本松

討ち入り市兵衛

春の淡雪

男の隠れ家

228 170 116 75 47 7

鬼平犯科帳（三十二）

泣き男な おとこ

一

その日。

火付盗賊ひつけとうぞく 改方あらためかたの同心・細川峯太郎は非番ひばんであつた。

「二度ある事は」の事件以来、細川同心は、ふたたび勘定方へもどされてしまい、溜部屋たまりの奥の一間で、筆紙と算盤そろばんを相手に、役宅から一步も出ずに御役目をつとめている。

あの事件で、むしろ、細川は手柄を立てたわけだが、その端緒たんしよとなつたのは、彼がいまだに目黒・権之助坂ごんのすけざかの茶店の寡婦かふお長ちやうへの未練みれんを絶ち切れず、おのれが受け持ちでもない目黒へのこのこと出かけて行つたことによる。

いまの細川峯太郎は、同役の老同心・伊藤清兵衛の娘お幸を妻にめとっているというのに、

「まことにもって怪しからぬ。おのれのような未練がましい男に探索方(たんさく)はつとまらぬ」と、長官(おかしら)の長谷川平蔵に叱りつけられ、以前の勘定方へもどされてしまった。

申すまでもなく、細川はおもしろくない。

いったん、探索方となって事件(か)に関わり、細川は細川なりに必死のはたらきをしてきて、(これで、おれも、どうやら盗賊改方の同心になれた)ひそかによるこんでいたのに、この失敗である。

先輩同心の木村忠吾が、

「やはり何だなあ、お前さんは算盤と相撲(すもう)をとっているほうが似合だよ」とか、

「色男に、荒っぽい探索方は少々むりだったかなあ」

とか、しきりにからかうのを、細川峯太郎がくやしげに睨(にら)みつけることも、しばしばである。そうしたわけで、四谷・坂町の組屋敷内にある自分の長屋へ帰り、妻のお幸と二人きりになつても細川は沈(しず)み込んでいる。

お幸も、しきりに気を揉(も)み、同じ組屋敷内の長屋に住む実父の伊藤清兵衛へ、

「御頭様(おかしら)のお怒りは、まだ、解けないのでしょうか？」

「うむ……」

「いったい、何故に、お怒りをこうむったのでしょうか？」

「さて、なあ……」

寡婦お長について、長谷川平蔵は、だれにも洩^もらしていなかったから、伊藤清兵衛にも理由がわからず、

「峯太郎は、探索方にも慣^なれ、しかも手柄を立てたというのに……いや、わしにも、さっぱりわからぬ」

と、いう。

非番になると、長屋にいて妻と顔を合わせているのも気が塞^{ふさ}ぐばかりなので、朝餉^{あさげ}をすませるや、

「ちょいと、出て来る」

お幸へいい、ぷいと外へ出て行き、日暮れまでもどらぬ。

だが、さすがに細川峯太郎、あれ以来、目黒へは足を向けていなかった。

この日も長屋を出た細川同心は、内藤新宿^{ないとうしんじゅく}から千駄ヶ谷の方へ、ぶらぶらと歩^{あゆ}んで行く。

着^きながしに両刀を帯^{ぬり}して塗笠^{ぬりがさ}をかぶるといふ、長官の市中見廻りの姿を、無意識のうちに細

川はまねているらしい。

細川峯太郎が、千駄ヶ谷八幡宮の境内^{けいだい}へ入ったとき、四ツ（午前十時）をまわっていたらう。

この八幡宮は土地^{とち}の惣鎮守^{そうちんじゅ}で、松・杉の木立も深い境内が広く、門前には藁屋根^{わらやね}の茶店が軒をつらねている。

八幡宮の門前は旧鎌倉街道だけに、日中は人通りも少くない。

細川は、門前の「つぼや」といふ茶店へ入り、先ず、酒を注文した。

店の土間の縁台で酒をのみながら、ためいきをつく。

ついては、のむ。

旨くない。

役宅へ出ているときは、たとえば、木村忠吾にからかわれても、

(この上、失敗を重ねたら、とんでもないことになる)

そうおもって我慢もするし、緊張もしているが、非番の日になると、悔しさがつのってきて胸がむかむかする。

(そうだ。御頭は、おれを憎んでいるのだ。それでなければ、こんな目に合わせるはずがない。お長のことはさておき、あのときだって、おれは手柄を立てたのではないか。それなのに、いつまでも怒りを解かぬというのは、あれで御頭も了見がせまいところがある。勘定方なぞは、年をとった岳父の伊藤清兵衛がちょうどよいのに……)

酒を二本のんで、尚も腹の虫がおさまらぬまま、外へ出た細川は通りがかりの男に躰を打付け、

「莫迦。気をつけろ!!」

と、喚いた。

喚いた途端に、細川の躰が宙に浮いた。

(ありや……?)

おどろいた瞬間に、いやというほど、細川峯太郎は地面へ叩きつけられている。

「う、うう……」

背中と腰を打ち、息もできぬ細川の顔へ、細川を投げつけた男が痰を吐きつけ、

「ふん……」

鼻で笑って遠ざかって行く。

男は編笠をかぶった浪人者で、細川同様の着ながし姿だけに、筋骨たくましい体格がはつきりと見てとれる。

「ま、待て……」

辛うじていったが、腰の激痛で、咄嗟に立ちあがれなかった。もともと、細川峯太郎は、腕におぼえがある男ではないのだ。

二

「畜生……畜生、畜生……」

秋晴れの午後の畑道を、とぼとぼと歩みつつ、細川峯太郎は口の中で自分を罵っている。

(あのぎまは何だ。御頭に愛想をつかされるのも当り前ではないか……)

盗賊どもから「鬼の平蔵」と畏怖されているほどの人物の配下の一人である自分が、

「まるで、野良猫のように……」

叩きつけられた上に痰を吐きつけられ、道行く人びとの失笑を浴びながらも、腰の痛みに件の浪人を追うこともできず……いや、追って行ったところで、どうしようもないわけだが、

（あまりにも、はずかしい……）

このことであつた。

たとえ身分は軽くとも、細川は將軍家に仕える侍なのだ。

（ああ……劍術の修行をしておけばよかった）

いまさらに悔んでみても、それこそ追いつかぬ。

ともかく細川は、這うようにして千駄ヶ谷八幡宮の境内へ入り、人目を避けたのち、境内の松林を抜け、裏門から出て歩みはじめた。

近くの仙寿院という寺の門前を流れる小川に架けられた橋を渡ったのはおぼえているが、後は、またしても口惜しさがこみあげてきて何処をどう歩いたのか、よくおぼえていない。

腰が痛むので、妙な歩き方をしていたらしく、道行く人びとが振り返って見るので、細川はたまらなくなり、畑道やら木立の中をえらび、西へ西へと歩いていたらしい。

この間に、何度か木立の中で腰をおろし、かなり長い時をすごしている。いつの間にか、日が傾きはじめたのに気づいて、

（や……おれは、いま、何処にいるのだ？）

右側の彼方に、どこかの大名の下屋敷らしい土堀が見えた。

左側に、小川が流れてい、細川は、小川に沿った木立の中を歩んでいた。

日の傾きぐあいから見て、

（これあ、渋谷の方へ歩いている……）

組屋敷へ帰るなら、引き返さねばならぬ。

(ああ、畜生。それにしても今日は、何という日だ)

身を転じようとしたとき、小川の向う岸の百姓家から男が二人、道へあらわれるのが木の間に
ごしに見えた。

見えた途端に、

(あつ……先刻の浪人だ)

細川峯太郎は、素早く地に伏せた。

まさに、八幡宮の門前で、細川を取って投げた背丈の高い浪人である。

それにもおどろいたけれども、

(こんなところに住んでいたのか……)

椎の木蔭へ躍り寄り、目を凝らした細川峯太郎が、

(おや……?)

意外の面持ちとなった。

いまでも、浪人が送って出た坊主頭の五十男を、細川は見知っている。

この男は浪人ではない。座頭である。按摩である。

名を「辰の市」といい、細川がいる四谷の組屋敷にも程近い塩町一丁目の路地の奥の小さな
家に、女房と二人で暮しているのだ。

座頭の辰の市の按摩上手は土地でもよく知られており、組屋敷内の与力の中にも、疲れがひ

どいときは、

「辰の市を……」

と、よび寄せ、治療をしてもらう人もいる。

細川も組屋敷内の通路で辰の市を見たし、四谷界隈かいわいの道では、何度も見かけていた。いうまでもなく、座頭であるからには盲人もうじんゆえ、辰の市の両眼は見えず、杖つえをたよりに歩んでいた。

ところが、どうだ。

いま、浪人と共に道へあらわれた辰の市は、杖を手にしていないではないか。杖のかわりに、菅笠を手をしている。

辰の市の両眼が見ひらかれているのを、細川峯太郎は木蔭から、はつきりとたしかめた。すると、辰の市は、

（座頭のふりをしていた……）

ことになる。

何故か？

（わからぬ……）

しかし、妙だ。おかしい。

しかも、こんなところで、得体えたいの知れぬ浪人と何やらひそひそと語り合っている。これは、たとえ盗賊改方の同心ならずとも、不審をおぼえたにちがいない。

百姓家の裏手の古井戸のところで、浪人と辰の市がささやき合っていたのは、ごく短い間のことだ。

すぐに辰の市は菅笠をかぶり、青山の方へ去った。

辰の市の姿が、彼方の寺院の横手の細道へ消えてしまうまで、浪人は垣根の内で見送っていた。

見送りながら、二度三度と、あたりへ目をくばった。

頬骨の張り出した精悍な顔貌で、年のころは四十前後と細川を見た。

総髪も、よく手入れをしてあり、着ている物も垢じみてはいない。髭の剃りあとが青々として、舞台の役者が青黛を塗ったように見える。

やがて、浪人は百姓家の中へ入った。淡くただよう夕闇の中に、川岸に咲きみだれる野菊が白く浮かんでいた。

（これあ、どう考えても変だ。たしかに……おかしい）

杖も手にせず、羽織をつけ、立ち去って行った辰の市は、いつも杖をたよりに身を屈め、四谷界隈を歩いているときとは、別人のようであった。

（辰の市は、笠で顔を隠し、此処へやって来た……）

これも怪しい。

つまり、盲人ではない自分を、知人に見られたくないからであろう。

こうなると、一時は探索方へまわって、盗賊どもの尾行もし、見張りもしてきた細川峯太郎